

文化交流の痛みと喜び

2006年日豪交流年と「海外と文化を交流する会」の関係と意義

ジョージ・W・ギッシュ（社）海外と文化を交流する会会長

今年は、2006年日豪交流年（YOE）と定められました。この交流年は、日豪友好協力基本条約（1976年）の締結30周年を記念するもので、その目的は、特に草の根レベルでの両国間の友好関係、相互理解、協力をさらに深めていくことです。

実は、この日豪協力基本条約が締結された同じ時期に、「海外と文化を交流する会」がいち早くその目的を果たそうとしました。1976年に会の創設者松岡朝氏の尽きせぬ努力によって、東京の日本橋三越で「現代日本画巨匠25人展」を開催した後、その25点をオーストラリアに贈呈することになりました。そして、明くる年、メルボルン・ナショナル・ギャラリーを始め、各地の展示会が開かれました。その後、ナショナル・ギャラリーに保管することになりましたが、長年に亘って、その行方ははっきり分かりませんでした。

幸いに、最近その日本画25点の所在の確認が出来、また、ヴィクトリア州芸術大臣メリ・デラフンチ氏の協力を得て、今年の秋に、メルボルンで「日本画25点記念展示会」を開催することになりました。その「記念展」に向けて現地の会場等色々な準備が行われています。日本側から、多摩美術大学教授の北條正庸画伯が「日本画及び日本文化の歴史と心」の特別講演活動を始め、私（ギッシュ）も「文化の違いから学び合う国際交流」のテーマで話す予定です。その中で、わが会のオーストラリアと日本画を通しての文化交流の「痛み」の意味に関する原点に触れたいと思います。

まず、30年前の会の関係者にとっては、当時の一番価値のある日本文化の遺産の一つであった日本画を今までと比較的に文化交流の少ない豪州に贈呈することによって、相手国の感謝と喜びが得られることを願いました。しかし、その価値は充分理解されずに、30年間贈呈された25点の日本画が粗末に扱われたことを知り、かえって痛みを覚えました。そこで、私たちが、その痛みを通して、本来の文化交流の意義について、深く考えさせられることとなりました。自分の心にある価値観と他者の価値観の違いがあること自体は、異文化交流の一つの原則でもあります。その違いを理解するために、何をすれば良いのか、どのような交流が必要なのか、この経験から検討する機会が与えられました。

その結果、今度の記念展の前後、日本画と日本文化の理解を深めるために、様々な催し物を企画することになりました。秋の展示会と講演会はその第一歩であり、その後の日豪の美術教育

交流プログラムも近い将来に向けて優先することを願っています。

日豪関係を62年前に遡れば、あのカウラ事件を思い起こします。1944(昭和19)年8月5日、午前2時、豪州カウラ捕虜収容所日本人キャンプに突如出撃ラッパが鳴り響き、喚声と共に日本人捕虜の突撃が決行された。その後、カウラの市民の手によって、犠牲となった日本人捕虜の墓地が建てられ、今でもそれを守っていることを知り、こうしたお互いの痛みを分かち合うことによって、人間の心と文化の交流がはじめて、可能になります。そこで、互いの喜びも生まれてくるものと考えます。

日本画・日本の心

北條正庸 日本画家・創画会会員、

多摩美術大学教授

このたびの2006年日豪交流年における豪州メルボルンでの日本画展の開催にあたり、縁あって当地におけるシンポジウムに参加する大役を引き受けることになりました。海外と文化を交流する会会報に一言とのご依頼、しかしこの大役はよくよく考えれば少々荷が重すぎる、と今さら反省しながら筆をとる次第です。

というのも、海外と文化を交流する会の尽力で1977年に実現した「日本の心を海外に届けよう」との趣旨に賛同した25人の作家の作品展と、豪州への作品寄贈は、当時を考えると趣旨はたいへんすばらしいものの、これだけのメンバーを一堂に会することは、たいへんに困難なことではなかったかと想像します。25人の作家おひとりお一人、第一線を走る方々で、私の口からいうのもたいへん恐縮なことです。人気作家の先生方でありますから、その作品を一堂に集めて展覧会を催す、さらにその作品を寄贈することは大きな資金と力が必要であったにちがいない。ましてや、海外での展覧会となると順調にいかないのがあたりまえ。それを実現し、今、その25人の作家の作品がオーストラリアにある事実は、とてもすばらしいことです。

また、それを無償で力を尽くされた海外と文化を交流する会の方々の力がひとつに結集して、実現したことと思います。このたび、この事実を知って、大きな驚きでした。

しかもその作品をもって再びオーストラリア・メルボルンでの日本画展が29年ぶりに開催されることになった、とてもすばらしいことです。そしてこのたびも海外と文化を交流する会の方々の尽力があることを度重なる会合で知り、私に何ができるのかと問いただす日々です。

「日本の心を海外に届けよう」との趣旨で国際交流が行われ、日本画の作品が海外に渡り、そしてその作品がどのように受け入れられて、国際交流の目的が十分に果たされてきたかがわかるのだらうと思います。しかもこうして再び多くの努力によって日本画展の開催になったのは、とてもうれしいことです。

私の個人的な立場であらためてこの 25 人の作家の方々の顔触れを拝見して、たいへん懐かしい思いを抱きました。おふたりの作家が私の大学生のときの恩師でした。おひとりには私が日本画家として歩み出したいせつな指針を示してくださった先生でした。もうひとりの方は、現在、後輩を教える立場になった私が、師の師たることを今、その先生の姿を通して感じさせてくださった方でした。

歩みの一步一步はとてもゆっくりで、その軸はぶれることなく一心に作品に向かい、茶の心を伝え、歌を詠んでは教え子に贈り、教え子の作品とて穴があくほど見つめてくださった。そのおふたりの先生から教授されたものは日本画とその心でした。このたびの日本画展の起点でもあった「日本の心を海外に届けよう」の日本の心は、まさしく日本画のなかにあります。紙と墨と顔料と膠を使って表現する絵画の中には、日本の心があります。そしてそれを伝えることができるすばらしい絵画技法であると言っても過言ではないと思っています。

このたびのメルボルンでのシンポジウムでは、日本の心を豪州の方々に再認識していただくために、日本画の一点一点の作品を通して「日本画とは」と問いかけ、日本の文化そして心(精神)を指し示し、理解していただければと願っています。

具体的には日本画の技法の指導ができればよりわかりやすいと思いますので、その計画も予定しています。なお、大学の交流についても実現可能であるかどうか、このすばらしい機会に扉をたたいてみたいと思っています。

以上のような計画で私に科せられた課題としたいと思っています。この会を通してまたは会報を通して、機会があれば、日本画についてゆっくりお話することができると思います。

中世を持たない多民族国家オーストラリア
アメリカとの比較

大谷 俊介

(社)海外と文化を交流する会 常務理事

はじめに個人事情の紹介をひとつ。アメリカの行政や外交が今の体制になってから、私は個人的にアメリカと絶交した。テレビからテキサス訛りの演説が流れると、あわててチャンネルを変える。ただし、絶交中と言っても、私がアメリカに行くのを止めただけで、重要な話や会合があれば先方が日本にいる間に行うか、あるいは必要なら来てもらえば良い。片側通行の個人的絶交状態が続いている。

中国ともしばらく前までそうだった。あの天安門事件が起って以来10年間絶交した。ただし、やはりその期間でも中国からの留学生や客人などは喜んで日本に迎え入れていた。そして、数年前にやっと絶交状態を解禁した。今では年に数回中国と行き来をしている。

私には仲の良いアメリカの友人がいる。その中で南部出身者が数人いる。彼等は自分の南部訛りを誇りにしているようだ。拙い語学力の私でもそれと判る、(あの嫌いな演説とは違う、)まるで詩を朗読しているような流暢な南部訛りを強調して会話や演説を聞かせてくれる。彼等とは今も時々日本で会っている。

その土地の特徴を示す美しい訛りと話し方が存在するのは、そこでの文化が熟成されているためであり、あとで述べるようにアメリカは新興国家ではあるが、この点でも独自の文化を持つようになっていると言える。

さて、今回は上のタイトルで、すなわち、国家の成り立ちとそこで育つ文化について考えてみたい。

中世を持たない点ではオーストラリアもアメリカも同類である。両国で時代は少し違うが、島流しにあったアングロ・サクソン系の囚人を主とする大量の移民がそれぞれの大陸に渡り、そこに定住し国を造った。そして、そこに古くから住み着いている少数民族である先住民を虐殺し駆逐した点でも両国は似ている。これらの先住民、ネイティブ・アメリカンやアボリジニには、それぞれ太古から育んで来た文化があり、その意味では、米豪が中世を持たない、というのは彼等に失礼な話であるが、ここではそれを追求しない。両国とも先住民虐殺というつらい歴史を持ってはいるが、「新世界」に渡った人たちが、苦勞を重ねながらも強い精神力で自分たちの住む地域を自らの手で広げていった状況も同じである。良くも悪くもこの開拓者魂が両国の国民性に大きな影響を残していることは間違いない。やることなすこと全てが新しく、古くから伝えられ

た生活様式や伝統を頼りに行動を決めることができない。両国とも中世から伝承された「古典」を持たないのである。その中から国と文化を造った。

近代自然科学の考え方の根底をなす現代物理学が興ったのはたかだか100年と少し前なので、新興国家のアメリカにあっても、ヨーロッパやアジアとの比較において自国の伝統の欠如に劣等感を感じることはない。それどころか、ドイツなどからナチズムの暴力を逃れてやってきたユダヤ系学者を国内に取り込んだ結果、国際的に最強な自然科学の先進文化国家となっている。

このような自信に満ちたアメリカの自然科学研究者たちも、ヨーロッパやアジアのどこかの国に集って会合する時、主催者が息抜きに文化遺跡や、美術館、博物館などの見学をアレンジしてくれて、一緒に話をしながら見て歩くと、そこでは自分たちの国の歴史の浅さを痛感するらしく、悲しそうで悔しそうな顔をする。これは本人たちに責任がまったくないのだから気の毒な話である。

さて本題に戻って、伝統を持たない国で培われた美術や音楽、工芸などはどのような形態となるのであろうか。私はこの道ではずぶの素人でまともな意見は持ちえない。ただあえて言うなら、アメリカを代表して、例えばアンディ・ウォーホルの絵などを見ると、何かある種ヨーロッパに対する劣等感と、そこから来るのであろう反骨心や開き直りみたいなほとばしりを感じず。こうした感じをすべてひと括りにして持つのは危険ではあろう。しかし、「新世界」にいる人間が作り上げる芸術が、かえってその伝統の無さを「バネ」に、国際舞台ではたしてどれだけ新しい動きを見せることができるのであろうか。それともアジア、ヨーロッパ、中東諸国の文化先進国のようになるにはあと何百年も待たなければならないのであろうか。

たしかに美術工芸の伝統作りには長い年月が必要とされる場合が多い。近くの例として日本美術の特質的伝統を考えてみる。日本の美の特徴のひとつに「装飾」がある、と言われる。工芸品に見られる「かざり」がその典型であらう。1万年以上も前に日本の先住民の縄文人は世界最古の土器を作った。それには、縄を巧みに使い、しかもそれをさまざまに変形させて作った多様な飾りが施されている。この装飾性が日本人の美意識の原点をなすと言われ、それが1万年以上の期間を経て洗練され、奈良、平安、鎌倉時代の美術工芸品に採り入れられ現在に至っている。他方、日本の美の表現の中には、例えば「余白、余情、余韻」や「中心をもたない非対称性」の強調が見てとれる。これらは日本に育った独特の美意識の現れなのではないか。前者は、描き尽さない、全てを言い尽さないことが奥床しく、美しいと想う日本人の感性から来ているのであろう。絵画で言えば、下地の「白」をいかに際立たせるかに工夫をこらし、俳句や和歌では、数量や情景などをばかして表現し読者に想像を膨らませようとする。そして後者の美的感覚は、例えば竜安寺の石庭とアルハンブラやヴェルサイユ宮殿の庭を比べて見れば一目瞭然であらう。整うことを嫌い、視点をばらまき、対称性をくずしたところに日本的な美があると言いたいかのようだ。

この日本の美的感覚は、ひとつはアニミズム的思想から来ていると言われる。日本には絶対的

な神はいなかった。全てのものに精霊が宿る、八百万（やおよろず）の神。白い朝霧の向こうにも、雪の中にも海にも山にも、かまどの火の中にも神がいる。一神による絶対的な視点を否定する。「もの」を見るのにひとつの視点で見ない、などなどの古来から受け継がれてきた日本の感性が芸術的表現に影響を与えている。

世界の多くの国々にもそれぞれ古い歴史があり、その中でそれぞれ独自の美的感性が育まれてきた。それらが美術工芸や建築などに強い影響を及ぼし、近世の芸術品にもそれが反映されているのであろう。

美を表現するには、本当に古い歴史が必要なのであろうか。いや、そんなことはないだろう。古い伝統をもつ国の人だけが高度な芸術性をもつことはないのであって、芸術の本質はそもそもそういう括りと縛りから超越しているはずである。

北米大陸には、まずアングロ・サクソン・ケルト系民族が移り住み、西に展開しつつも南部で農地が開墾されると労働力獲得のため、アフリカから黒人たちを強制連行し奴隷に仕立て上げた。遅れてイタリア、フランスなどのヨーロッパ諸国からも移民が流入し、カリブ海、メキシコからの移民も参入し多民族国家が造られた。そして、黒人奴隷たちの慰みの中からジャズやゴスペル・ソングが生まれ、イタリア系移民はマフィア組織も作ったが、映画やミュージカル芸術を産み出すのに大きく貢献した。フランス系移民は独特のクレオール文化を南部に残している。そして、このアメリカは近代建築やインテリア・デザインなどにおいても世界に冠たる芸術的な作品を産み出している。

もちろん、ヨーロッパの古典工芸や音楽に対しても強い憧れをもち、その吸収欲も学習熱も高かった。そのため、近世になりこれらの芸術も立派な進展を見せている。それはアメリカの大都市にある美術館やオペラハウスを訪れると良く判る。しかし、真にアメリカ的な独自の芸術は、前述のジャズにあり、映画などに強調される。これらは、まさしく伝統を持たない新興国の多民族共生社会であるアメリカの中から生まれ出た世界に誇るべき芸術であらう。

他方、オーストラリアはどうなのであろうか。実は私はこの方面の事情をほとんど知らない。ただし、元気の良い映画界があり、ニコール・キッドマン、ラッセル・クロウ、メル・ギブソンなど秀れた俳優を輩出していることは知っている。そして、古くからアボリジニは抽象的なデザインの美しい色の絵や彫り物を作っている。メルボルンの国立美術館も立派であるし、そこに隣接する芸術大学も活発であり、ビクトリア州には芸術省があることは知っている。芸術の振興に熱心であることは間違いない。さてこの国でどういう芸術が生まれてくるのであるのであろうか。

オーストラリアこそ真正銘の多民族共生社会である。建国はアメリカより新しく、第2次世界大戦後に大量の移民を迎えた。その数たるや人口比の数10%に及び、それはイスラエル建国時と比肩する民族大移動であり、その出身は東部、南部ヨーロッパからアジア諸国、中南米を含み130ヶ国を越え世界に類を見ない多様さである。この急激に多様化した社会をまとめるに当

って、オーストラリアはかつての「白豪主義」、すなわち、アングロ・サクソンの宗教や生活様式を単一文化として至上のものとする考え方から、必然的に価値観の多様性を認め多民族が共生しうる「多文化主義」に政策転換したのであった。現実問題として、民族的多様性を国の活力にせざるを得なかったのである。

この路線は同じ多民族社会の先輩国家アメリカとは異なっている。そして、決定的な相違は、アメリカが自ら宗主国である英国に戦争をしかけて独立を勝ち取った点にある。オーストラリアは、未だに英国国王を戴く立憲君主制で英連邦に属している。この事実は、国としてのアイデンティティを強く持ちうるか否かを通してそれぞれの国民性に大きな影響を与えている。その結果、アメリカでは、多民族それぞれに違うさまざまな価値観をひとつのアメリカ文化という枠の中に融和させつつ、それを進化発展させようとする同化主義路線に沿って社会を造ってきた。この中ではそれぞれの民族が持っている独自の価値観や生活様式は原型を留めず碎かれひとつの文化の中に組み入れられる。

一方、オーストラリアでは異なった文化や伝統をもつ人間がひとつに集って、混然としながらも多様性をもつ新しい文化、国家を造り上げようとしている。それ故、オーストラリアはサラダ・ボウル型社会と呼ばれる。それを見るにはメルボルンに行くが良い。メルボルンはオーストラリアの中では古い街並を持ち、人口規模は日本の中小都市サイズでしっとりとした良い町である。その中心近くには中華街があり、少しはなれてギリシャ人やベトナム人の集落がある。そして、町はずれのメルボルン大学の隣りには多勢のイタリア人が住みイタリアン・パブやリストランテが沢山並んでいる。これらの集落に入ると英語ではなくそれぞれの国の言葉が飛び交っている。これでこの町はひとつの方向性を持って統治されていくのだろうか、と日本人なら心配してしまう。

オーストラリアのこの多文化主義による多民族共生の路線はまだはじまって半世紀にならない。しかし、この壮大な実験とも言える、国家とそこに育つ文化創成の営みがどのように芸術に反映されていくかを大きな期待をもって見守りたい。